

**Oracle® Application Server Repository Creation
Assistant**

ユーザーズ・ガイド

10g (9.0.4.0.2) for UNIX Systems

部品番号 : B14108-01

2004 年 7 月

Oracle Application Server Repository Creation Assistant ユーザーズ・ガイド, 10g (9.0.4.0.2) for UNIX Systems

部品番号 : B14108-01

原本名 : Oracle Application Server Repository Creation Assistant User's Guide, 10g (9.0.4.0.2) for UNIX

原本部品番号 : B13912-01

Copyright © 2004 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
このマニュアルの構成	vi
関連ドキュメント	vi
表記規則	vii
1 Oracle Application Server Repository Creation Assistant の概要と要件	
1.1 概要	1-2
1.2 リリース 9.0.4 からの変更	1-2
1.2.1 9.0.4.0.2 の新機能	1-2
1.2.2 9.0.4.0.1 の新機能	1-3
1.3 ディスク領域の要件	1-4
1.4 データベースの要件	1-4
1.4.1 データベースのリリース	1-5
1.4.1.1 Oracle9i リリース 1 (9.0.1.x) データベース	1-6
1.4.1.2 Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース	1-7
1.4.2 Standard Edition データベース：注意	1-8
1.4.3 SSL モードで Oracle Internet Directory に登録する場合に必要なパッチ	1-8
1.4.4 初期化パラメータ	1-8
1.4.5 データベース・オプション	1-12
1.4.6 PL/SQL パッケージ	1-13
1.4.7 DBMS_LDAP パッケージ	1-13
1.4.8 ナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ必要)	1-15
1.4.9 パスワード・ファイル認証	1-16
1.4.10 スキーマおよび表領域	1-17

1.4.10.1	すでに使用されているスキーマ名	1-18
1.4.10.2	すでに使用されている表領域名	1-18
1.4.10.3	表領域のサイズ	1-19
1.4.10.4	スキーマおよび表領域のリスト	1-22
1.4.11	Oracle Internet Directory への登録	1-24
1.5	スワップ領域の要件	1-25
1.6	Oracle Internet Directory のリリース	1-25
1.7	Oracle Ultra Search ディレクトリの更新	1-26

2 Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行

2.1	Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動	2-2
2.1.1	CD-ROM または DVD からの Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行	2-2
2.1.2	ハード・ドライブからの Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行	2-4
2.2	次に読むべき項	2-5
2.3	ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール	2-6
2.4	RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール	2-9
2.5	Real Application Clusters データベースへのインストール	2-13
2.5.1	インストールの概要	2-14
2.5.2	クラスター・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順	2-15
2.5.3	RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順	2-17
2.6	自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール	2-20
2.6.1	ディスク・グループへのインストール	2-21
2.6.2	標準のファイルへのインストール	2-23
2.7	Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール	2-26
2.8	Oracle Internet Directory への登録	2-29
2.9	インストール後の手順	2-34
2.9.1	sqlnet.ora ファイルの更新	2-34
2.9.2	DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定	2-34

3 cleanMR スクリプトの実行

3.1	ハード・ディスクへのディレクトリのコピー	3-2
3.2	cleanMR スクリプトの実行	3-2

4 Metadata Repository の登録解除

4.1	失敗した登録のクリーンアップまたは Metadata Repository の登録解除	4-2
-----	---	-----

5 トラブルシューティング

5.1	Oracle Application Server Repository Creation Assistant のデータベースへの接続が失われる (エラー・コード:ORA-03113)	5-2
5.2	ログ・ファイル内の問題のないエラー・メッセージ	5-2

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Application Server Repository Creation Assistant ツールを実行して OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにロードする方法について説明します。また、Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する際にも使用できます。

対象読者

このマニュアルは、データベース管理者を対象としています。データベースに SYS ユーザーとしてログインできる必要があります。データベースの初期化パラメータ値の変更、スキーマおよび表領域のバックアップ、データベースの再起動などの手順を実行します。

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は、次のとおりです。

第 1 章「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の概要と要件」

この章では、Oracle Application Server Repository Creation Assistant の概要、および領域とデータベースの要件を示します。

第 2 章「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行」

この章では、Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動のために指定する必要があるパラメータについて説明します。また、Oracle Application Server Repository Creation Assistant の画面についても説明します。

第 3 章「cleanMR スクリプトの実行」

この章では、OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域をデータベースから削除する cleanMR スクリプトの使用方法について説明します。

第 4 章「Metadata Repository の登録解除」

この章では、OracleAS Metadata Repository が登録されている Oracle Internet Directory からエントリを削除する方法について説明します。

第 5 章「トラブルシューティング」

この章では、一般的な問題と解決策について説明します。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』
- 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 10g 概要』

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則が使用されます。

規則	意味
太字	本文中の太字は、画面上の要素（ボタンやフィールドなど）を示します。
code	コード・フォントは、ファイル名、コマンド、構成ファイルの内容を示します。
<i>italicized code</i>	イタリック体のコード・フォントは、適切な値で置き換える必要があるプレースホルダ・テキストを示します。
[]	大カッコに囲まれた項目は、そのうちの1つを選択するか、いずれも選択しないことを示します。
...	省略記号は、関係のない情報が省略されていることを示します。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant の概要と要件

OracleAS Metadata Repository は、OracleAS Metadata Repository 用に新しくデータベースを作成しなくても、既存のデータベースにインストールできます。この章では、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用してインストールを実行する方法について説明します。また、Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する際にも使用できます。

注意：

- このガイドでは、既存の OracleAS Metadata Repository をアップグレードする方法については説明しません。アップグレードの手順については、『Oracle Application Server 10g アップグレード』を参照してください。
 - Oracle Application Server Repository Creation Assistant では、リリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository を、10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory に登録できません。
 - OracleAS Metadata Repository は、Oracle E-Business Suite インスタンスを含むデータベースにロードできません。現在のところ、サポートされていません。
-

この章の構成

- 1.1 項「概要」
- 1.2 項「リリース 9.0.4 からの変更」
- 1.3 項「ディスク領域の要件」
- 1.4 項「データベースの要件」
- 1.5 項「スワップ領域の要件」

- 1.6 項「Oracle Internet Directory のリリース」
- 1.7 項「Oracle Ultra Search ディレクトリの更新」

1.1 概要

OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールするには、Oracle Application Server Repository Creation Assistant と呼ばれるツールを実行します。このツールは、OracleAS Metadata Repository データを既存のデータベースにロードします。

CD-ROM: Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、"Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" CD-ROM にあります。Disk 1 ではありません。

DVD: Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、DVD の repca_utilities ディレクトリにあります。

1.2 リリース 9.0.4 からの変更

- 1.2.1 項「9.0.4.0.2 の新機能」
- 1.2.2 項「9.0.4.0.1 の新機能」

1.2.1 9.0.4.0.2 の新機能

表 1-1 に、9.0.4.0.2 リリースの新機能を示します。

表 1-1 9.0.4.0.2 リリースの新機能

説明	詳しい参照先
自動ストレージ管理 (ASM) を使用するデータベースに、OracleAS Metadata Repository をインストールできるようになりました。	2.6 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
Oracle Managed Files を使用するデータベースに、OracleAS Metadata Repository をインストールできるようになりました。	2.7 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」
shared_pool_size 初期化パラメータは最低でも 144MB に設定する必要があります。以前のリリースでは、最低値が 100MB でした。	1.4.4 項「初期化パラメータ」
OracleAS Metadata Repository を Oracle Managed Files にインストールする場合、db_create_file_dest 初期化パラメータを設定する必要があります。	1.4.4 項「初期化パラメータ」

表 1-1 9.0.4.0.2 リリースの新機能 (続き)

説明	詳しい参照先
Oracle Database 10g に OracleAS Metadata Repository をインストールする場合、最初にナレッジ・ベースをインストールする必要があります。	1.4.8 項「ナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ必要)」
インストール後の手順が必要な場合があります。	2.9 項「インストール後の手順」
SSL モードを使用して Oracle Internet Directory に OracleAS Metadata Repository を登録する場合、パッチを適用する必要があります。	1.4.3 項「SSL モードで Oracle Internet Directory に登録する場合に必要なパッチ」

1.2.2 9.0.4.0.1 の新機能

表 1-2 に、9.0.4.0.1 リリースの新機能を示します。

表 1-2 9.0.4.0.1 リリースの新機能

説明	詳しい参照先
OracleAS Metadata Repository を、Oracle Database 10g にインストールできるようになりました。	1.4.1 項「データベースのリリース」
runRepca コマンドに、次のコマンドライン・パラメータが追加されています。	表 2-1 「runRepca コマンドのパラメータ」
<ul style="list-style-type: none"> ■ -REGNREALM。OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory のレルムを指定できます。 ■ -RAW。RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。これらのデータベースは、Real Application Clusters データベースでも、Real Application Clusters 以外のデータベースでもかまいません。 	
RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードする場合は、-RAC と -RAW の両方のコマンドライン・パラメータを使用する必要があります。	2-4 ページの「-RAW および -RAC パラメータを使用する場合」
ボリューム・マネージャまたはクラスタ・ファイル・システムで管理される Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードできるようになりました。-RAC コマンドライン・パラメータを指定する必要があります。	2.5.3 項「RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順」

表 1-2 9.0.4.0.1 リリースの新機能（続き）

説明	詳しい参照先
Real Application Clusters データベースへの登録のみを実行する場合に、-RAC を指定する必要がなくなりました。-REGISTER パラメータを指定するのみでかまいません。	2.8 項「Oracle Internet Directory への登録」
large_pool_size 初期化パラメータを特定の値に設定する必要がなくなりました。以前は、0 に設定する必要がありました。	1.4.4 項「初期化パラメータ」
現在必要な初期化パラメータは次のとおりです。	1.4.4 項「初期化パラメータ」
<ul style="list-style-type: none"> ■ undo_management = AUTO ■ compatible = 9.0.1.5 以上 	

1.3 ディスク領域の要件

次の項目について、十分なディスク領域があることを確認してください。

表 1-3 表領域に必要なディスク領域

項目	必要なディスク領域
Oracle Application Server Repository Creation Assistant で表領域を作成するディレクトリに必要なディスク領域	1.15GB
SYSTEM 表領域の拡張に必要なディスク領域	500MB

1.4 データベースの要件

OracleAS Metadata Repository をインストールするデータベースは、表 1-4 に示す各項目について一定の要件を満たす必要があります。

ヒント： Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行すると、これらの要件のほとんどが自動的に確認されます。SQL 文を手動で実行する必要はありません。自分で確認する必要がある項目は、表に示してあります。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant による確認の結果、データベースが要件を満たしていない場合、要件を満たすように修正しなければ操作を続行できません。場合によっては、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了して問題を修正する必要があります。その修正によって、データベースの再起動が必要になる場合もあります。

表 1-4 データベースの要件

項目	確認
1.4.1 項「データベースのリリース」	自動
1.4.2 項「Standard Edition データベース：注意」	-
1.4.3 項「SSL モードで Oracle Internet Directory に登録する場合に必要なバッチ」	-
1.4.4 項「初期化パラメータ」	一部自動ではない
1.4.5 項「データベース・オプション」	自動
1.4.6 項「PL/SQL パッケージ」	自動
1.4.7 項「DBMS_LDAP パッケージ」	自動
1.4.8 項「ナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ必要)」	-
1.4.9 項「パスワード・ファイル認証」	-
1.4.10 項「スキーマおよび表領域」	自動
1.4.11 項「Oracle Internet Directory への登録」	-

1.4.1 データベースのリリース

OracleAS Metadata Repository は、次のデータベース・リリースにインストールできます。

表 1-5 サポートされるデータベース・リリース

データベースのシリーズ	サポートされるリリース	詳細情報
Oracle9i リリース 1 (9.0.1.x)	9.0.1.5 以上 注意： AIX では、Oracle9i リリース 1 (9.0.1.x) はサポートされていません。	1.4.1.1 項「Oracle9i リリース 1 (9.0.1.x) データベース」
Oracle9i リリース 2 (9.2.x)	9.2.0.4 以上	1.4.1.2 項「Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース」
Oracle Database 10g	リリース 1 (10.1)	--

データベースのリリースを確認するには、次のように `PRODUCT_COMPONENT_VERSION` ビューを問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select version from product_component_version where product like 'Oracle%9i%'
       or product like 'Oracle%Database%';
```

`password` は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

1.4.1.1 Oracle9i リリース 1 (9.0.1.x) データベース

9.0.1.x データベースの場合、そのリリースが 9.0.1.5 以上であることを確認します。

9.0.1.5 パッチ・セットを適用すると、9.0.1.x より前のリリースをリリース 1 (9.0.1.5) にアップグレードできます。パッチ・セット 3301544 を参照してください。

現行のパッチ・レベルを確認するには、`sys.patch$` を問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select version from sys.patch$;
```

このコマンドにより 9.0.1.5 が返されます。

9.0.1.5 パッチ・セットの適用 : OracleAS Metadata Repository を実行するためだけにデータベースを使用する場合、実行する必要があるのは次のインストール後の手順のみです。

- シングル・ユーザー・モードのデータベースでの `catpatch.sql` の実行。
- Oracle Text のアップグレード・スクリプトの実行。
- データベースの Java オプションをアップグレードするスクリプトの実行 (`jvmursec.sql`、`initxml.sql`、`xmlja.sql`)。
- PL/SQL パッケージを再コンパイルする `utlrbp.sql` の実行。

注意： 9.0.1.5 パッチ・セットを適用する際には、パッチ・セットの README ファイルの説明にあるように、必ず `catpatch.sql` スクリプトを実行してください。適用しない場合、Oracle Application Server Repository Creation Assistant がデータベースに Metadata Repository をロードするときにエラーが発生します。

9.0.1.5 パッチ・セットのその他すべてのインストール後の手順は、OracleAS Metadata Repository ではオプションとなります。それらのオプションを実行するのは、Oracle Application Server 以外でそのオプションを使用する場合、またはデータベースが Real Application Clusters データベースの場合にパッチ・セットの Real Application Clusters 部分が必要な場合のみです。

1.4.1.2 Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース

9.2.x データベースの場合、そのリリースが 9.2.0.4 以上であることを確認します。

9.2.0.4 パッチ・セットを適用すると、9.2.0.x より前のリリースをリリース 2 (9.2.0.4) にアップグレードできます。

9.2.0.4 パッチ・セットの適用 : OracleAS Metadata Repository を実行する場合、インストール後の手順として必要なのは次の手順のみです。

- 初期化パラメータ (init.ora) が指定どおりに設定されていること、SYSTEM 表領域に十分な空き領域があること、および必要に応じて CLUSTER_DATABASE 環境変数が設定されていることの確認。
- シングル・ユーザー・モードのデータベースでの catpatch.sql の実行 (パッチ・セットの README ファイルの手順 3c)。
- utlirp.sql の実行 (パッチ・セットの README ファイルの手順 3h)。
- Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x を実行していた場合のみ、Oracle Internet Directory のパッチの実行。データベースで Oracle Internet Directory を使用していなかった場合は、この手順を実行する必要はありません。

9.2.0.4 パッチ・セットのその他すべてのインストール後の手順は、OracleAS Metadata Repository ではオプションです。それらのオプションの実行は、Oracle Application Server 以外でそのオプションを使用する場合のみ必要です。

catpatch.sql スクリプトが実行されているかどうかを確認するには、SQL*Plus で次のコマンドを実行します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select comp_name, version, status from dba_registry
       where comp_id = 'CATPROC';
```

結果は次のとおりです。

COMP_NAME	VERSION	STATUS
Oracle9i Packages and Types	9.2.0.4.0	Valid

注意： catpatch.sql スクリプトが、9.2.0.4 データベースに対して実行されていることを確認してください。データベースの Oracle ホームにパッチを適用して 9.2.0.4 にアップグレードしている場合でも、Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して作成した新しいデータベースでは、catpatch.sql スクリプトが実行されていないことがあります。これは、catpatch.sql スクリプトが実行されていないシード・テンプレートまたはカスタム・テンプレートから、DBCA を使用してデータベースを作成した場合に生じます。

このようなデータベースの場合、最初にデータベースに対して catpatch.sql を実行してから Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行します。

1.4.2 Standard Edition データベース：注意

Standard Edition データベースのリリース 1 (9.0.1.x) またはリリース 2 (9.2.0.x) を使用する場合、Oracle Internet Directory のマルチマスター・レプリケーション機能は使用できません（この機能は、Enterprise Edition データベースのみで使用可能な ASR に依存するためです）。

かわりにファンアウト・レプリケーション機能を使用できます。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

1.4.3 SSL モードで Oracle Internet Directory に登録する場合に必要なパッチ

SSL モードを使用して Oracle Internet Directory に OracleAS Metadata Repository を登録する場合、登録を行う前にデータベースにパッチ 3143899 を適用する必要があります。

このパッチは、Oracle9i リリース 2 (9.2.0.4) データベースにのみ必要です。このパッチはすでに Oracle9i リリース 2 (9.2.0.5) データベースに含まれており、Oracle9i リリース 1 (9.0.1.5) データベースおよび Oracle Database 10g には必要ありません。

1.4.4 初期化パラメータ

インストール時に、データベースの初期化パラメータが表 1-6 に示す値に設定されている必要があります。

インストール後、これらのパラメータの大部分はパフォーマンスを最適化するために必要に応じて変更できます。

注意：

- db_block_size パラメータの値は 8192 以上である必要があります。このパラメータは、データベースが作成されたときに設定され、変更できません。このパラメータの値が 8192 より小さいデータベースは、Metadata Repository に使用できません。
- Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、次のパラメータを確認しません。

```
compatible
nls_length_semantics
max_commit_propagation_delay
```

これらのパラメータは、表 1-6 に指定されている許容値が設定されているかどうかを手動で確認する必要があります。

表 1-6 初期化パラメータ：必要な値

パラメータ	必要な値	パラメータ・クラス	注意
db_block_size	8192 以上	変更不可。「注意」列を参照。	データベースの作成後にこのパラメータ値を変更することはできません。
aq_tm_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
open_cursors	300 以上	9.2.x では動的 9.0.1.x では静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
job_queue_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
db_cache_size	144MB より大きく、 2GB 未満	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
shared_pool_size	144MB より大きく、 2GB 未満	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
java_pool_size	64MB より大きく、 2GB 未満	静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
pga_aggregate_target	96MB より大きく、 2GB 未満	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
query_rewrite_enabled	TRUE	動的	OracleAS Wireless がこの値を必要とするため、インストール後はこのパラメータを変更できません。

表 1-6 初期化パラメータ：必要な値（続き）

パラメータ	必要な値	パラメータ・クラス	注意
query_rewrite_integrity	trusted または enforced	動的	OracleAS Wireless がこの値を必要とするため、インストール後はこのパラメータを変更できません。
sessions	400 以上	静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
undo_management	AUTO	静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
nls_length_semantics	BYTE	動的	注意： Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、このパラメータを確認しません。手動で確認する必要があります。 このパラメータには、CHAR はサポートされていません。
max_commit_propagation_delay	99 以下	静的	注意： Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、このパラメータを確認しません。手動で確認する必要があります。 このパラメータは Real Application Clusters データベースにのみ適用されます。
compatible	9.0.1.5 以上	静的	注意： Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、このパラメータを確認しません。手動で確認する必要があります。 このパラメータは 9.0.1.5 より低い値に設定しないでください。
db_create_file_dest	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータ・ファイルを作成するディレクトリ	動的	この初期化パラメータは、Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合のみ必要です。

パラメータ値の確認

SQL*Plus を使用して初期化パラメータの値を確認するには、次のように show parameters コマンドを使用します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters parameter_name
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

または、次のように V\$PARAMETER ビューを問い合わせることもできます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name,value from v$parameter;
```

パラメータ値の変更

パラメータの値を変更する方法は、そのパラメータが静的または動的のどちらであるか、あるいはデータベースがパラメータ・ファイルとサーバー・パラメータ・ファイルのどちらを使用するかによって決まります。

パラメータ・ファイル、サーバー・パラメータ・ファイルおよびパラメータ値の変更方法については、使用するデータベースの『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

データベースでパラメータ・ファイルを使用する場合、次のいずれかの方法でパラメータ値を変更できます。

- パラメータ・ファイルを編集してからデータベースを再起動します。この方法は、静的なパラメータと動的なパラメータのどちらにも使用できます。
- 動的なパラメータの値は、alter system コマンドで変更できますが、この方法で設定した新しい値は、データベースを停止するまでの間のみ有効になります。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9;
```

データベースがサーバー・パラメータ・ファイルを使用する場合は、alter system コマンドでパラメータ値を変更します。静的なパラメータの場合は、scope を spfile に設定します。新しい値を有効にするには、データベースを再起動する必要があります。動的なパラメータの場合は、scope を spfile、memory または both に設定します。値を永続させるには、scope を spfile または both に設定します。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9 scope=both;
```

1.4.5 データベース・オプション

データベースでは、次のデータベース・オプションが有効になっている必要があります。

表 1-7 必要なデータベース・オプション

必要なオプション	データベースにインストールされているオプションの確認方法						
OLAP ウィンドウ・ファンクション パラレル・ロード	<p>これらのオプションがデータベースで有効になっているかどうかを確認するには、次のように V\$OPTION ビューを問い合わせます (<i>password</i> は SYS ユーザーのパスワードを指定します)。</p> <pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select * from v\$option;</pre> <p>問い合わせ結果の中に、次の 2 行が表示されます。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>PARAMETER</th> <th>VALUE</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>OLAP Window Functions</td> <td>TRUE</td> </tr> <tr> <td>Parallel load</td> <td>TRUE</td> </tr> </tbody> </table>	PARAMETER	VALUE	OLAP Window Functions	TRUE	Parallel load	TRUE
PARAMETER	VALUE						
OLAP Window Functions	TRUE						
Parallel load	TRUE						
Java	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(*) from dba_objects where object_type like 'JAVA%' and owner = 'SYS' and status = 'VALID';</pre> <p>返される数は 0 より大きい値です。</p>						
Intermedia	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(name) from sys.props\$ where name = 'EXPORT_VIEWS_VERSION';</pre> <p>返される数は 0 より大きい値です。</p>						
Oracle Text	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(*) from dba_views where owner = 'CTXSYS' and view_name = 'CTX_VERSION';</pre> <p>返される数は 0 より大きい値です。</p>						

1.4.6 PL/SQL パッケージ

データベースには、次の PL/SQL パッケージがインストールされている必要があります。

```
DBMS_DDL
DBMS_LOCK
DBMS_OUTPUT
DBMS_REPUTIL
DBMS_SQL
DBMS_STATS
DBMS_UTILITY
UTL_FILE
UTL_RAW
```

データベースにパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、ALL_OBJECTS ビューを問い合わせます。次の例は、DBMS_DDL パッケージを確認しています。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select count(object_name) from all_objects
      where object_name like 'DBMS_DDL%' and
      status = 'VALID';
```

パッケージごとに問合せを実行します。DBMS_DDL をそれぞれのパッケージの名前で置き換えます。返される数は 0 より大きい値です。

1.4.7 DBMS_LDAP パッケージ

データベースに DBMS_LDAP パッケージが含まれていて、そのパッケージが有効であることを確認します。有効でない場合、パッケージを再インストールする必要があります。

1. DBMS_LDAP パッケージのリリースが 2 であることを確認します。次の SQL コマンドにより 0 が返されます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select dbms_ldap_utl.check_interface_version('2') from dual;

DBMS_LDAP_UTL.CHECK_INTERFACE_VERSION('2')
-----
0
```

このコマンドによって、0以外の値が返される場合、または次のようなエラーが返される場合、

The DBMS_LDAP package supplied with this database doesn't support the version 2 interface used by 904 components.

パッケージを再ロードする必要があります。この項の最後の「[DBMS_LDAP パッケージの再ロード](#)」に進んでください。

2. DBMS_LDAP パッケージが有効であることを確認します。次の SQL コマンドにより 9 が返されます。

- a. 次の行を含むファイルを作成します。ファイル名には、たとえば test_ldap.sql など、任意の名前を付けることができます。

```
select count(*) from dba_objects where
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
object_type = 'SYNONYM' and
status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'SYNONYM' and
status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
```

```
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_LIB' and
object_type = 'LIBRARY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
);
```

- b. SQL*Plus でファイルを実行します。たとえば、ファイル名が `test_ldap.sql` の場合、コマンドは次のとおりです。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @test_ldap.sql
```

```
      COUNT(*)
-----
          9
```

このコマンドによって 9 以外の値が返される場合、パッケージを再ロードする必要があります。

DBMS_LDAP パッケージの再ロード

1. 次のファイルが `ORACLE_HOME/rdbms/admin` ディレクトリに存在することを確認します。

- `catldap.sql`
- `dbmsldap.sql`
- `prvtldap.plb`
- `prvtldh.plb`

2. SQL*Plus を使用して、SYS ユーザーとして `catldap.sql` を実行します。

```
prompt> cd $ORACLE_HOME/rdbms/admin
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @catldap.sql
```

1.4.8 ナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ必要)

Oracle Database 10g に OracleAS Metadata Repository をインストールする場合、手動でナレッジ・ベースをインストールする必要があります。Oracle Database 10g Companion CD-ROM からナレッジ・ベースをインストールできます。

1.4.9 パスワード・ファイル認証

データベースは、パスワード・ファイル認証を使用するように設定されている必要があります。パスワード・ファイル認証の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

パスワード・ファイル認証は、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行する場合にのみ必要です。Metadata Repository がインストールされている場合、パスワード・ファイル認証は必要ありません。

データベースがパスワード・ファイル認証を使用するように設定されているかどうかは、次の2つの方法のうちのいずれかで確認できます。

- SQL*Plus で次のコマンドを実行して、remote_login_passwordfile 初期化パラメータの値を検索します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters remote_login_passwordfile
NAME                                TYPE                                VALUE
-----                                -                                -
remote_login_passwordfile           string                             EXCLUSIVE
```

remote_login_passwordfile 初期化パラメータの値は、EXCLUSIVE または SHARED のいずれかである必要があります。このパラメータが別の値である場合、または定義されていない場合、データベースはパスワード・ファイル認証を使用するように設定されていません。

- SQL*Net 接続によって sysdba としてデータベースへの接続を試みます。

```
prompt> sqlplus "sys/password@sqlnet_dbname as sysdba"
```

sqlnet_dbname は、tnsnames.ora ファイルでのデータベースのエントリを表します。データベースでパスワード認証が設定されていない場合、ユーザーは接続できません。

データベースにパスワード・ファイル認証を設定しているにもかかわらず、ORA-01017 エラー「ユーザー名 / パスワードが無効です。ログオンは拒否されました。」を受け取る場合、パスワード・ファイルの設定時に SYS パスワードを変更したことが原因である可能性があります (password パラメータで指定する値によって、SYS ユーザーのパスワードが設定されます)。その場合、元の SYS パスワードに戻します。

sysdba OS 権限があれば、SYS としてログインできます。その場合、任意のパスワードを指定できます。sysdba OS 権限によって、パスワードがオーバーライドされます。

```
prompt> sqlplus "sys/badPassword as sysdba"
SQL> alter user sys identified by newPassword;
SQL> exit
```

これで、"sys/newPassword@sqlnet_dbname as sysdba" によってデータベースに接続できます。

パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースを設定する手順は、次のとおりです。

1. orapwd コマンド（すべて 1 行）を使用して、パスワード・ファイルを作成します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/orapwd file=fullpath_to_pwfile password=password
entries=maxUsers
```

指定する必要がある値：

fullpath_to_pwfile - パスワード情報が記述されるファイルのフルパスを指定します。ファイル名は *orapwsid* です。通常、パスワード・ファイルは ORACLE_HOME/dbfs ディレクトリに格納されます。

password - SYS ユーザーのパスワードを設定します。

注意： *password* パラメータに指定する値は、SYS ユーザーのパスワードを設定します。現在の SYS パスワードと異なる値を指定すると、SYS パスワードは変更されます。

maxUsers - ファイルに含まれるユーザーの最大数を指定します。

次の例は、"mydb" という名前のデータベースにパスワード・ファイルを設定しています。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/orapwd
file=/opt/oracle/db92/OraHome1/dbfs/orapwmydb
password=topsecret entries=9
```

2. *remote_login_passwordfile* 初期化パラメータを EXCLUSIVE に設定します。同じパスワード・ファイルを複数のデータベースで使用する場合、SHARED に設定します。Real Application Clusters データベースの場合、このパラメータは EXCLUSIVE に設定する必要があります。
3. データベースを再起動します。

1.4.10 スキーマおよび表領域

Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、表 1-11 に示すスキーマおよび表領域を既存のデータベースにインストールします。同じ名前のスキーマおよび表領域がデータベースに含まれていないことを確認してください。

1.4.10.1 すでに使用されているスキーマ名

Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、既存のデータベースで同じ名前のスキーマを1つでも検出すると、削除する前にユーザーに確認を求め、新しいデータでスキーマを再作成します。

そのスキーマのデータを保存するときは、続行しないでください。その場合、保存するデータをバックアップし、別のスキーマでリストアして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再実行します。その後、スキーマを削除して再作成します。

データベースの既存のスキーマ名をリスト表示するには、次のように ALL_USERS ビューを問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"  
SQL> select username from all_users;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

OracleAS Metadata Repository が使用していたスキーマおよび表領域を削除するスクリプトを実行するには、3.2 項「[cleanMR スクリプトの実行](#)」を参照してください。

1.4.10.2 すでに使用されている表領域名

Oracle Application Server Repository Creation Assistant によって既存のデータベースで同じ名前の表領域が1つでも検出されると、続行できません。エラー・ダイアログが表示されません。その場合、次の手順に従います。

1. エラー・ダイアログを閉じ、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。
2. 必要に応じて表領域のデータをバックアップします。
3. 表領域を削除します。
4. Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再実行します。

データベースの既存の表領域名をリスト表示するには、次のように V\$TABLESPACE ビューを問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"  
SQL> select name from v$tablespace;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

注意： Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行して完了する前に取り消すと、表 1-11 に示す表領域がデータベースに作成されることがあります。その表領域は、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再実行する前に削除してください。

OracleAS Metadata Repository が使用していたスキーマおよび表領域を削除するスクリプトを実行するには、3.2 項「cleanMR スクリプトの実行」を参照してください。

表領域を削除するには、cleanMR スクリプトを実行するか、手動で SQL 文を実行します。スクリプトについては、3.2 項「cleanMR スクリプトの実行」を参照してください。

手動で SQL 文を実行するには、次の手順に従います。タスクの順序は重要です。最初にデータ・ファイルを削除すると、表領域を削除できなくなります。表領域が存在する場合、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再実行できません。

1. SQL*Plus を使用して、SYS ユーザーとしてデータベースにログインします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

2. 表領域のスキーマを削除します。

```
SQL> drop user schema_name cascade;
```

3. 表領域を削除します。

```
SQL> drop tablespace tablespace_name including contents cascade constraints;  
SQL> exit;
```

4. 表領域に関連付けられていたデータ・ファイル (.dbf ファイル) を削除します。

1.4.10.3 表領域のサイズ

表領域に RAW デバイスではなくファイルを使用する場合、Oracle Application Server Repository Creation Assistant が作成する各表領域に対してサイズを選択します。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant では、3 通りのサイズを指定できません (表 1-8 を参照)。コンポーネントの使用レベルの軽度、中度、重度に対応します。コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、そのコンポーネントの表領域には最大サイズを選択します。リポジトリとともにコンポーネントを使用しない場合には、最小サイズを選択します。

表領域のサイズは初期サイズです。表領域は AUTOEXTEND に設定されているので、コンポーネントが大量に使用されると表領域のサイズが増加します。

表 1-8 表領域の初期サイズ

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
OracleAS Portal	PORTAL	75	100	150
OracleAS Portal	PORTAL_DOC	25	40	50
OracleAS Portal	PORTAL_IDX	30	50	60
OracleAS Portal	PORTAL_LOG	30	50	60
OracleAS Single Sign-On	IAS_META	200	300	500
OracleAS Wireless				
Oracle Ultra Search				
Oracle Workflow				
INTERNET_APPSERVER_ REGISTRY (スキーマ)				
OracleAS Discoverer	DISCO_PTM5_META	5	10	15
OracleAS Discoverer	DISCO_PTM5_CACHE	5	10	15
OracleAS Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	50	100	200
OracleAS Syndication Services	DSGATEWAY_TAB	25	35	45
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS_TS	35	45	55
OracleAS ProcessConnect	IP_RT	50	75	90
OracleAS ProcessConnect	IP_DT	60	75	90
OracleAS ProcessConnect	IP_IDX	20	40	60
OracleAS ProcessConnect	IP_LOB	20	40	60
OracleAS Certificate Authority	OCATS	15	35	55
OracleAS UDDI	UDDISYS_TS	35	50	65
Oracle Internet Directory	OLTS_ATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_BATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_CT_STORE	10	15	20

表 1-8 表領域の初期サイズ (続き)

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
Oracle Internet Directory	OLTS_DEFAULT	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_SVRMGSTORE	10	15	20

既存データベースが RAW デバイスを使用する場合、表領域のサイズを選択する必要はありません。ただし、RAW デバイスのサイズがコンポーネントに対して十分であることを確認してください (表 1-9 および表 1-10 を参照)。コンポーネントを大量に使用する予定があり、データベースが RAW デバイスを使用する場合は、表領域用の RAW デバイスに使用可能な領域が十分あるようにします。

表 1-9 システムの表領域の最小サイズ

表領域	最小サイズ
SYSTEM 表領域	1024MB
TEMP 表領域	128MB
UNDOTBS1 表領域	256MB
UNDOTBS2 表領域	256MB
DRSYS 表領域	64MB

表 1-10 OracleAS Metadata Repository の RAW デバイス

RAW デバイスの対象	最小サイズ	推奨される名前
PORTAL 表領域	128MB	<i>dbname_raw_portal_128m</i>
PORTAL_DOC 表領域	64MB	<i>dbname_raw_portaldoc_64m</i>
PORTAL_IDX 表領域	64MB	<i>dbname_raw_portalidx_64m</i>
PORTAL_LOG 表領域	64MB	<i>dbname_raw_portallog_64m</i>
DCM 表領域	256MB	<i>dbname_raw_dcm_256m</i>
OCATS 表領域	64MB	<i>dbname_raw_ocats_64m</i>
DISCO_PTM5_CACHE 表領域	64MB	<i>dbname_raw_discoptm5cache_64m</i>
DISCO_PTM5_META 表領域	64MB	<i>dbname_raw_discoptm5meta_64m</i>
DSGATEWAY_TAB 表領域	64MB	<i>dbname_raw_dsgatewaytab_64m</i>

表 1-10 OracleAS Metadata Repository の RAW デバイス (続き)

RAW デバイスの対象	最小サイズ	推奨される名前
WCRSYS_TS 表領域	64MB	<i>dbname_raw_wcrsysys_64m</i>
UDDISYS_TS 表領域	64MB	<i>dbname_raw_uddisysys_64m</i>
OLTS_ATTRSTORE 表領域	128MB	<i>dbname_raw_oltsattrstore_128m</i>
OLTS_BTTRSTORE 表領域	64MB	<i>dbname_raw_oltsbttrstore_64m</i>
OLTS_CT_STORE 表領域	256MB	<i>dbname_raw_oltsctstore_256m</i>
OLTS_DEFAULT 表領域	128MB	<i>dbname_raw_oltsdefault_128m</i>
OLTS_SVRMGSTORE 表領域	64MB	<i>dbname_raw_oltssvrmgstore_64m</i>
IP_DT 表領域	128MB	<i>dbname_raw_ipdt_128m</i>
IP_RT 表領域	128MB	<i>dbname_raw_iprt_128m</i>
IP_LOB 表領域	128MB	<i>dbname_raw_iplob_128m</i>
IP_IDX 表領域	128MB	<i>dbname_raw_ipidx_128m</i>
IAS_META 表領域	256MB	<i>dbname_raw_iasmetal_256m</i>

RAW デバイスの使用方法については、データベースのマニュアルを参照してください。

1.4.10.4 スキーマおよび表領域のリスト

表 1-11 は、OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域のリストです。

表 1-11 スキーマおよび表領域

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データベース・ファイル
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_DOC	ptldoc.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_IDX	ptlidx.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_LOG	ptllog.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_APP	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	PORTAL	portal.dbf

表 1-11 スキーマおよび表領域 (続き)

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データベース・ファイル
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Wireless	WIRELESS	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Workflow	OWF_MGR	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_META	discopl1m1.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_CACHE	discopl1c1.dbf
OracleAS Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	DCM	dcm.dbf
OracleAS Syndication Services	DSGATEWAY	DSGATEWAY_TAB	oss_sys01.dbf
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS	WCRSYS_TS	wcrsys01.dbf
OracleAS ProcessConnect	IP	IP_DT	ip_dt.dbf
OracleAS ProcessConnect	IP	IP_RT	ip_rt.dbf
OracleAS ProcessConnect	IP	IP_LOB	ip_lob.dbf
OracleAS ProcessConnect	IP	IP_IDX	ip_idx.dbf
OracleAS Certificate Authority	OCA	OCATS	oca.dbf
OracleAS Certificate Authority	ORAOCA_PUBLIC	OCATS	oca.dbf
OracleAS UDDI	UDDISYS	UDDISYS_TS	uddisys01.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_ATTRSTORE	attrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_BATTRSTORE	battr1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_CT_STORE	gcats1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_DEFAULT	gdefault1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_SVRMGSTORE	svrmg1_oid.dbf

表 1-11 スキーマおよび表領域 (続き)

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データベース・ファイル
Oracle Ultra Search	WKSYS	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Ultra Search	WKPROXY	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Ultra Search	WK_TEST	IAS_META	ias_meta01.dbf
Metadata Repository Version	INTERNET_APPSERVER_REGISTRY	IAS_META	ias_meta01.dbf

1.4.11 Oracle Internet Directory への登録

既存のデータベースが Oracle Internet Directory にまだ登録されていないことを確認します。Oracle Internet Directory に登録済のデータベースは、登録できません。

データベースが Oracle Internet Directory に登録済かどうかを確認するには、Oracle Internet Directory で次のように確認します。

1. Oracle Directory Manager を使用して、Oracle Internet Directory に接続します。

- a. Oracle Directory Manager を起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```

- b. 「接続」画面で、接続情報を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。

2. データベースが Oracle Internet Directory に登録済かどうかを確認します。次のようにエントリを開きます。

「エントリ管理」を開きます。

「cn=OracleContext」を開きます。

データベースが Oracle Internet Directory に登録済の場合は、「cn=*your_database_name*」というエントリが表示されます。

登録を削除する方法は、[4.1 項「失敗した登録のクリーンアップまたは Metadata Repository の登録解除」](#)の手順 2 を参照してください。

3. Oracle Internet Directory に登録済の Metadata Repository がデータベースにあるかどうかを確認します。次のようにエントリを開きます。

「エントリ管理」を開きます。

「cn=OracleContext」を開きます。

「cn=Products」を開きます。

「cn=IAS」を開きます。

「cn=IAS Infrastructure Databases」を開きます。

Oracle Internet Directory に登録済の Metadata Repository がデータベースにある場合は、「orclReferenceName=*your_database_name*」というエントリが表示されます。

登録を削除する方法は、[4.1 項「失敗した登録のクリーンアップまたは Metadata Repository の登録解除」](#)の手順 3 を参照してください。

1.5 スワップ領域の要件

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行するには、使用できるスワップ領域が少なくとも 512MB 必要です。確認および必要に応じて増やす方法については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

1.6 Oracle Internet Directory のリリース

Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する場合、Oracle Internet Directory はリリース 9.2.0.x、9.0.2.x または 9.0.4 である必要があります。

Oracle9i データベース 9.2.x および Oracle Internet Directory 9.2.0.x を使用するユーザーの場合

既存の Oracle9i データベース・リリース 2 (9.2) と Oracle Internet Directory 9.2.0.x を Oracle Application Server で使用するには、次の手順を実行する必要があります。

1. データベースが要件を満たしていることを確認します。[1.4 項「データベースの要件」](#)を参照してください。
2. OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードし、データベースを Oracle Internet Directory に登録します。[2.3 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」](#)を参照してください。
3. Oracle Internet Directory をリリース 9.0.4 にアップグレードします。『Oracle Application Server 10g アップグレード』の第 5 章の Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x から 10g (9.0.4) へのアップグレードに関する項を参照してください。
4. Oracle Application Server コンポーネントを OracleAS Metadata Repository と Oracle Internet Directory にインストールします。

Oracle Internet Directory 9.0.2.x を使用するユーザーの場合

Oracle Internet Directory 9.0.2 を使用するには、9.0.2 の Metadata Repository が必要です。可能な構成については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の第 3 章「以前のリリースとの互換性」を参照してください。

Oracle Internet Directory のリリースの確認

Oracle Internet Directory のリリースを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
prompt> oidldapd -version
oidldapd: Release 9.2.0.1.0 - Production on Fri Feb 28 09:26:53 2003
(c) Copyright 2001 Oracle Corporation. All rights reserved.
```

oidldapd コマンドは ORACLE_HOME/bin ディレクトリにあります。ここで ORACLE_HOME は、Oracle Internet Directory をインストールしたルート・ディレクトリです。

1.7 Oracle Ultra Search ディレクトリの更新

Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、データベースの Oracle ホーム・ディレクトリにある ultrasearch ディレクトリを新しいリリースに置き換えます。古いリリースの名前が ultrasearch_*timestamp* に変更されます。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行

この章の構成

- 2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」
- 2.2 項「次に読むべき項」
- 2.3 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」
- 2.4 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」
- 2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」
- 2.6 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
- 2.7 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」
- 2.8 項「Oracle Internet Directory への登録」
- 2.9 項「インストール後の手順」

2.1 Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動

Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、OracleAS Metadata Repository を既存データベースにインストールするためのツールです。Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、CD-ROM または DVD から直接実行することも、ファイルをコピーしたハード・ドライブから実行することもできます。

- [2.1.1 項「CD-ROM または DVD からの Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行」](#)
- [2.1.2 項「ハード・ドライブからの Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行」](#)

注意： Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、"Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" CD-ROM にあります。Oracle Application Server Disk 1 ではありません。

DVD の場合は、`repca_utilities` ディレクトリにあります。

2.1.1 CD-ROM または DVD からの Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行

CD-ROM または DVD から Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行するには、次の手順に従います。

1. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行します。このツールは、データベースの Oracle ホームにあるバイナリにアクセスする必要があります。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動する前に、既存データベースのリスナーおよびデータベース自体が起動され実行中であることを確認します。

2. コンピュータが CD-ROM または DVD を自動的にマウントしない場合、マウント・ポイントを手動で設定します。
3. "Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。または、DVD を DVD ドライブに挿入します。
4. 次のように、CD-ROM または DVD から Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。

CD-ROM: `prompt> mount_point/repCA/runRepca [parameters]`

DVD: `prompt> mount_point/repca_utilities/runRepca [parameters]`

`runRepca` コマンドには、次のパラメータを指定できます。

表 2-1 runRepca コマンドのパラメータ

パラメータ	必須またはオプション	説明
-OH <i>oracle_home</i>	必須	Metadata Repository をインストールするデータベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを指定します。このパラメータを指定しないと、Oracle Application Server Repository Creation Assistant によって入力を求められます。
-LOGDIR <i>logdir</i>	オプション	Oracle Application Server Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリのフルパスを指定します。指定しない場合、Oracle Application Server Repository Creation Assistant は ORACLE_HOME/assistants/repca/log ディレクトリにログ・ファイルを書き込みます。ユーザーはログ・ディレクトリに対する書き込み権限を持っている必要があります。
-REGNREALM <i>realm</i>	オプション	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory のレルムを指定します。レルムの単純な名前を使用して指定します。 このパラメータを指定しない場合、Oracle Application Server Repository Creation Assistant はルート of oracle コンテキスト (cn=oraclecontext) の下に OracleAS Metadata Repository を登録します。 Oracle Database 10g では、エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ機能を使用して Oracle Delegated Administration Services と OracleAS Single Sign-On を一緒に機能させるには、データベースをレルムの oracle コンテキストの下に登録する必要があります。エンタープライズ・ユーザー・セキュリティの詳細は、Oracle Database 10g ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』を参照してください。
-REGISTER	オプション	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録のみするように指定します。スキーマをデータベースにインストールしません。
-RAW	オプション	データベースが、そのデータベース・ファイルとして RAW デバイスを使用することを指定します。
-RAC	オプション	Real Application Clusters データベースであることを指定します。
-HELP	オプション	パラメータのヘルプを表示します。

例：

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs
```

-RAW および -RAC パラメータを使用する場合

これらのパラメータを指定する必要があるのは、RAW デバイスを使用するデータベースまたは Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合のみです。

表 2-2 に、それぞれの使用例で使用する適切なパラメータを示します。

表 2-2 -RAW および -RAC パラメータを使用する場合

格納タイプ	Real Application Clusters データベース以外	Real Application Clusters データベース
ファイル・システム	-RAC と -RAW のいずれも必要なし。 2.3 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」 を参照してください。	Real Application Clusters データベースはファイル・システムで実行できません。
クラスタ・ファイル・システム (Oracle Cluster File System など) またはボリューム・マネージャ (EMC または Veritas など)	-RAC と -RAW のいずれも必要なし。 2.3 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」 を参照してください。	-RAC 2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」 を参照してください。
RAW デバイス	-RAW 2.4 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」 を参照してください。	-RAW -RAC 2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」 を参照してください。

2.1.2 ハード・ドライブからの Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行

ハード・ドライブから Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行するには、次の手順に従います。

1. Oracle Application Server Repository Creation Assistant ファイルをハード・ドライブにコピーします。データベースをインストールしているコンピュータからハード・ドライブにアクセスできることを確認します。Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、データベースの Oracle ホームにあるバイナリにアクセスする必要があります。

次のファイルをハード・ドライブにコピーします。

- CD-ROM: "Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" CD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーします。

- DVD: repca_utilities ディレクトリの内容をハード・ドライブにコピーします。
2. Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動する前に、既存データベースのリスナーおよびデータベース自体が起動され実行中であることを確認します。
 3. ハード・ドライブから Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/repCA/runRepca [parameters]
```

パラメータの説明は、[表 2-1](#) を参照してください。

2.2 次に読むべき項

この章の以降の項では、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにロードする手順について説明しています。読む必要がある項は、既存のデータベースの種類によって異なります。

表 2-3 次に読むべき項

データベース・タイプ	格納タイプ	読むべき項
Real Application Clusters 以外	ファイル・システム	2.3 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」
Real Application Clusters 以外	RAW デバイス	2.4 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」
Real Application Clusters	クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャ	2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」
Real Application Clusters	RAW デバイス	2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」
自動ストレージ管理 (ASM)	ディスク・グループ	2.6 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
自動ストレージ管理 (ASM)	ファイル・システム	2.6 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
Oracle Managed Files	ファイル・システム	2.7 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するのみの場合は、[2.8 項「Oracle Internet Directory への登録」](#) を参照してください。

2.3 ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール

この項では、データベース・ファイルとしてファイル・システムを使用する既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合は、[2.4 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository を Real Application Clusters データベースにインストールする場合は、[2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」](#)を参照してください。

ファイル・システムを使用する既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが [1.4 項「データベースの要件」](#) に示す要件を満たしていることを確認します。
2. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。[2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。この場合に必要なパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は `-OH` および `-LOGDIR`、特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は `-REGNREALM` です。たとえば、次のようになります。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs -REGNREALM  
abcRealm
```

3. RAW ファイル・システムに表領域を作成するかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Will you be creating the Application Server tablespaces on raw filesystems [Y |  
N]? N
```

4. Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードするかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Do you plan to use a Real Application Clusters database for your Metadata  
Repository [Y | N]? N
```

5. 次の各画面で指示に従います。

表 2-4 OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールする手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」:SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」:データベースのコンピュータ名およびポート番号を入力します。形式は、<i>hostname:port</i> です。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) :myhost:1521</p> <p>例 2 (異なるドメイン) :myhost.mydomain.com:1521</p> <p>「サービス名」:データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。</p> <p>例 : asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 「警告:スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。
4. 「表領域情報の指定」	<p>「すべての表領域に同じディレクトリを使用」:すべての表領域のすべてのファイルと同じディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。このオプションの下でフィールドでディレクトリを指定します。ディレクトリに十分な空き領域があることを確認してください。</p> <p>「表領域ごとに別個のディレクトリを使用」:表領域のファイルを別々のディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>「表領域」:ツリーを開いて各コンポーネントの表領域を表示します。関連するデータ・ファイルまたはサイズを表示 / 編集するには、表領域を選択します。</p> <p>「サイズ」:コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。</p> <p>「ファイル名」:データベース・ファイルの名前を入力します。例:portal.dbf</p> <p>「ディレクトリ」:表領域のデータベース・ファイルを配置するディレクトリを入力します。「...」ボタンをクリックするとファイル・システムを参照できます。</p> <p>例: /opt/oracle/dbfiles/</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-4 OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストールする手順（続き）

画面	アクション
5. 「Oracle Internet Directory への登録」	<p>すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」：登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合、「登録をスキップ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前（jdoe など）または DN（cn=orcladmin など）を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 「リポジトリをロードしています」	<p>Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。</p>
8. 「成功しました」	<p>「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。</p>

6. インストール後の手順を実行します。[2.9 項「インストール後の手順」](#)を参照してください。

2.4 RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール

この項では、Real Application Clusters 以外で RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースがある場合は、[2.5 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」](#)を参照してください。

RAW デバイスを使用する Real Application Clusters 以外のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが [1.4 項「データベースの要件」](#) に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS Metadata Repository 用の RAW デバイスを作成します。

RAW デバイスを作成する必要がある表領域とその最小サイズについては、[表 1-10](#) を参照してください。

RAW デバイスを作成するコマンドは、使用するボリューム・マネージャ固有のコマンドです。たとえば、VERITAS Volume Manager を使用する場合は `vxassist` です。

3. 表領域を RAW デバイスにマッピングするためのファイルを作成します。

ファイルの各行の形式は、次のとおりです。

```
tablespace_name=raw_device_file_path
```

次のサンプル・ファイルの RAW デバイスのファイル・パスを実際の値に置き換えると、そのまま使用できます。サンプル・ファイルに示すように、表領域名の後ろに "1" を追加します。

```
PORTAL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_128m
PORTAL_DOC1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_doc_64m
PORTAL_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_idx_64m
PORTAL_LOG1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_log_64m
IAS_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ias_meta_256m
DISCO_PTM5_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_meta_64m
DISCO_PTM5_CACHE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_cache_64m
DCM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_dcm_256m
DSGATEWAY_TAB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_synd_64m
WCRSYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_clip_64m
IP_DT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_dt_128m
IP_RT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_rt_128m
IP_LOB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_lob_128m
IP_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_idx_128m
OCATS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_oca_64m
UDDISYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_uddi_64m
OLTS_ATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_attr_128m
OLTS_BATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_battr_64m
```

```
OLTS_CT_STORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_ct_store_256m
OLTS_DEFAULT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_default_128m
OLTS_SVRMGSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_svrmgstore_64m
```

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマのリストは、[14.10 項「スキーマおよび表領域」](#)を参照してください。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行すると、このファイルが読み込まれ、そのデータが「表領域情報の指定」画面に反映されます。この画面でデータを確認します。

このファイルを作成しなくても、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行して OracleAS Metadata Repository を Real Application Clusters データベースにインストールできます。ただし、その場合は Oracle Application Server Repository Creation Assistant がファイルを読み込んでデータを表示する画面のフィールドが空白のままになるため、データを手動で入力する必要があります。

4. DBCA_RAW_CONFIG 環境変数をファイルのフルパスに設定します。

たとえば、このファイルを /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt として保存した場合、次のように環境変数を設定します。

```
setenv DBCA_RAW_CONFIG /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt
```

5. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。[2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。この場合に必要なパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は -OH、-RAW および -LOGDIR、特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は -REGNREALM です。たとえば、次のようになります。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -RAW -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs -REGNREALM
abcRealm
```

6. RAW ファイル・システムに表領域を作成するかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**Y** と入力します。

```
Will you be creating the Application Server tablespaces on raw filesystems [Y |
N]? Y
```

7. Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードするかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Do you plan to use a Real Application Clusters database for your Metadata
Repository [Y | N]? N
```

8. 次の各画面で指示に従います。

表 2-5 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」:SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」:データベースのコンピュータ名およびポート番号を入力します。形式は、<i>hostname:port</i> です。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) :myhost:1521</p> <p>例 2 (異なるドメイン) :myhost.mydomain.com:1521</p> <p>「サービス名」:データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。</p> <p>例 : asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 「警告:スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。
4. 「表領域情報の指定」	この画面に、DBCA_RAW_CONFIG 環境変数が指すファイルから読み込まれた値が表示されます。必要に応じて値を修正し、「次へ」をクリックします。
5. 「Oracle Internet Directory への登録」	<p>すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」:登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合、「登録をスキップ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-5 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順 (続き)

画面	アクション
6. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 「リポジトリをロードしています」	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。
8. 「成功しました」	「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。

9. インストール後の手順を実行します。2.9 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.5 Real Application Clusters データベースへのインストール

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用して、既存の Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます (図 2-1)。この環境では、表 2-6 に示すように、OracleAS Infrastructure 10g コンポーネントが別々の場所にインストールされます。

図 2-1 Real Application Clusters データベースの OracleAS Infrastructure 10g と OracleAS Metadata Repository

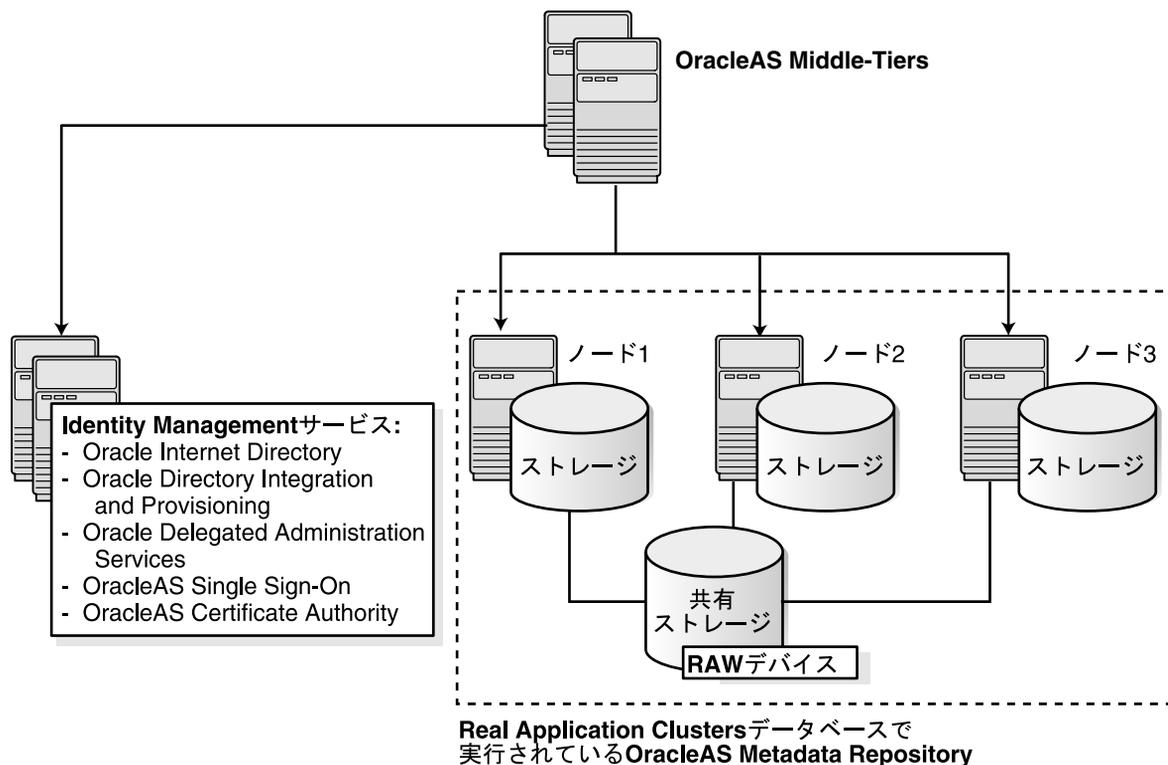


表 2-6 OracleAS Infrastructure 10g と Real Application Clusters

コンポーネント	インストール場所
OracleAS Metadata Repository	既存の Real Application Clusters データベース
Identity Management コンポーネント	クラスタ以外のコンピュータ

2.5.1 インストールの概要

注意： この環境を構築するには、既存の Real Application Clusters データベースが必要です。

インストーラでは、OracleAS Metadata Repository を含む新規の Real Application Clusters データベースを作成できません。

この環境を構築するには、次のように Oracle Application Server をインストールします。

1. OracleAS Metadata Repository を既存の Real Application Clusters データベースにインストールします。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用してこれを実行します。Real Application Clusters データベースが使用する格納タイプによって、手順が異なります。

- 2.5.2 項「クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順」
- 2.5.3 項「RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順」

注意： Oracle Internet Directory をまだインストールしていないため、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しないでください。

2. Identity Management コンポーネントをクラスタ以外のコンピュータにインストールします。

すべての Identity Management コンポーネントを単一のコンピュータにインストールすることも、複数のコンピュータに分散することもできます。詳細は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

インストーラの Metadata Repository のログインおよび接続情報を指定するための画面でデータベース・ホスト名の入力を要求されたら、Real Application Clusters のすべてのノード名および各ノードのポート番号を入力します。形式は、`node:port` です。各ペアはカンマ文字で区切ります。

たとえば、クラスタに 3 つのノード（名前は `node1`、`node2`、`node3`）があり、リスナーがすべてのノードをポート 1521 でリスニングする場合、次のように入力します。

```
node1:1521, node2:1521, node3:1521
```

3. Oracle Application Server Middle-Tier をインストールします。

2.5.2 クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順

クラスタ・ファイル・システム (Oracle Cluster File System など) またはボリューム・マネージャ (Veritas または EMC など) を使用する既存の Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが 1.4 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。
2. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。この場合に必要のパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は `-OH`、`-RAC` および `-LOGDIR`、特定のレムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は `-REGNREALM` です。たとえば、次のようになります。

```
runRePCA -OH /opt/oracle/oradb -RAC -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs -REGNREALM
abcRealm
```

3. 次の各画面で指示に従います。

表 2-7 クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」: Real Application Clusters データベースを実行するコンピュータの名前とリスナーが使用するポート番号を入力します。形式は、<code>host:port</code> です。各 <code>host:port</code> は、次のようにカンマ文字で区切ります。</p> <p><code>hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</code></p> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) : <code>myhost:1521, myhost2:1521</code></p> <p>例 2 (異なるドメイン) : <code>myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain:1521</code></p> <p>「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。</p> <p>例 : <code>asdb.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-7 クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順 (続き)

画面	アクション
3. 「警告: スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。
4. 「表領域情報の指定」	<p>「すべての表領域に同じディレクトリを使用」: すべての表領域のすべてのファイルと同じディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。このオプションの下のフィールドでディレクトリを指定します。ディレクトリに十分な空き領域があることを確認してください。</p> <p>「表領域ごとに別個のディレクトリを使用」: 表領域のファイルを別々のディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>「表領域」: ツリーを開いて各コンポーネントの表領域を表示します。関連するデータ・ファイルまたはサイズを表示 / 編集するには、表領域を選択します。</p> <p>「サイズ」: コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。</p> <p>「ファイル名」: データベース・ファイルの名前を入力します。例: portal.dbf</p> <p>「ディレクトリ」: 表領域のデータベース・ファイルを配置するディレクトリを入力します。「...」ボタンをクリックするとファイル・システムを参照できます。</p> <p>例: /opt/oracle/dbfiles/</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 「Oracle Internet Directory への登録」	<p>すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」: 登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合、「登録をスキップ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-7 クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順 (続き)

画面	アクション
7. 「リポジトリをロードして います」	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。
8. 「成功しました」	「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。2.9 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.5.3 RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順

OracleAS Metadata Repository を Real Application Clusters データベースにインストールする手順は、次のとおりです。

1. データベースが 1.4 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS Metadata Repository 用の RAW デバイスを作成します。

RAW デバイスを作成する必要がある表領域とその最小サイズについては、表 1-10 を参照してください。

RAW デバイスを作成するコマンドは、使用するボリューム・マネージャ固有のコマンドです。たとえば、VERITAS Volume Manager を使用する場合は `vxassist` です。

3. 表領域を RAW デバイスにマッピングするためのファイルを作成します。

ファイルの各行の形式は、次のとおりです。

```
tablespace_name=raw_device_file_path
```

次のサンプル・ファイルの RAW デバイスのファイル・パスを実際の値に置き換えると、そのまま使用できます。次のサンプル・ファイルに示すように、表領域名の後ろに "1" を追加します。

```
PORTAL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_128m
PORTAL_DOC1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_doc_64m
PORTAL_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_idx_64m
PORTAL_LOG1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_log_64m
IAS_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ias_meta_256m
DISCO_PTM5_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_meta_64m
DISCO_PTM5_CACHE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_cache_64m
```

```
DCM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_dcm_256m
DSGATEWAY_TAB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_synd_64m
WCRSYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_clip_64m
IP_DT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_dt_128m
IP_RT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_rt_128m
IP_LOB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_lob_128m
IP_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ip_idx_128m
OCATS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_oca_64m
UDDISYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_uddi_64m
OLTS_ATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_attr_128m
OLTS_BATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_battr_64m
OLTS_CT_STORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_ct_store_256m
OLTS_DEFAULT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_default_128m
OLTS_SVRMGSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_svrmgstore_64m
```

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマのリストは、[1.4.10 項「スキーマおよび表領域」](#)を参照してください。

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行すると、このファイルが読み込まれ、そのデータが「表領域情報の指定」画面に反映されます。この画面でデータを確認します。

このファイルを作成しなくても、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行して OracleAS Metadata Repository を Real Application Clusters データベースにインストールできます。ただし、その場合は Oracle Application Server Repository Creation Assistant がファイルを読み込んでデータを表示する画面のフィールドが空白のままになるため、データを手動で入力する必要があります。

4. DBCA_RAW_CONFIG 環境変数をファイルのフルパスに設定します。

たとえば、このファイルを /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt として保存した場合、次のように環境変数を設定します。

```
setenv DBCA_RAW_CONFIG /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt
```

5. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。[2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。この場合に必要のパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は -OH、-RAC、-RAW および -LOGDIR、特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は -REGNREALM です。たとえば、次のようになります。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -RAC -RAW -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs  
-REGNREALM abcRealm
```

6. 次の各画面で指示に従います。

表 2-8 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」: Real Application Clusters データベースを実行するコンピュータの名前とリスナーが使用するポート番号を入力します。形式は、<i>host:port</i> です。各 <i>host:port</i> は、次のようにカンマ文字で区切ります。</p> <p><i>hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</i></p> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) : <i>myhost:1521, myhost2:1521</i></p> <p>例 2 (異なるドメイン) : <i>myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</i></p> <p>「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。</p> <p>例 : <i>asdb.mydomain.com</i></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 「警告: スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。
4. 「表領域情報の指定」	この画面に、DBCA_RAW_CONFIG 環境変数が指すファイルから読み込まれた値が表示されます。必要に応じて値を修正し、「次へ」をクリックします。
5. 「Oracle Internet Directory への登録」	<p>すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」: 登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directory がない場合、その接続情報がわからない場合または OracleAS Cluster に対してのみ OracleAS Metadata Repository を使用する場合、「登録をスキップ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-8 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール手順 (続き)

画面	アクション
6. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 「リポジトリをロードしています」	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。
8. 「成功しました」	「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。

7. インストール後の手順を実行します。2.9 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.6 自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール

この項では、自動ストレージ管理 (ASM) を使用するデータベースの既存のディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

ASM 構成のデータベースでは、既存のディスク・グループまたは標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。ディスク・グループを使用する場合、データベースには、構成されているディスク・グループが少なくとも 1 つ必要になります。

- 2.6.1 項「ディスク・グループへのインストール」
- 2.6.2 項「標準のファイルへのインストール」

2.6.1 ディスク・グループへのインストール

この項では、ASM インスタンスのディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

ASM インスタンスに OracleAS Metadata Repository をインストールする際に、ディスク・グループではなく標準のファイルにインストールする場合は、[2.6.2 項「標準のファイルへのインストール」](#)を参照してください。

ASM インスタンスのディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが [1.4 項「データベースの要件」](#) に示す要件を満たしていることを確認します。
2. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。[2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。この場合に必要のパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は `-OH` および `-LOGDIR`、特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は `-REGNREALM` です。たとえば、次のようになります。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs -REGNREALM  
abcRealm
```

3. RAW ファイル・システムに表領域を作成するかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Will you be creating the Application Server tablespaces on raw filesystems [Y |  
N]? N
```

4. Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードするかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Do you plan to use a Real Application Clusters database for your Metadata  
Repository [Y | N]? N
```

5. 次の各画面で指示に従います。

表 2-9 ASM インスタンスのディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」:SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」:データベースのコンピュータ名およびポート番号を入力します。形式は、<i>hostname:port</i> です。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) :myhost:1521</p> <p>例 2 (異なるドメイン) :myhost.mydomain.com:1521</p> <p>「サービス名」:データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。</p> <p>例 :asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 「警告:スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。
4. 「表領域作成の記憶域メカニズムを指定」	<p>「表領域は、自動ストレージ管理 (ASM) で管理されるように作成します」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 「ディスク・グループを選択」	<p>データベースに複数のディスク・グループがある場合、OracleAS Metadata Repository をインストールするディスク・グループを選択するための画面が表示されます。</p> <p>データベースにディスク・グループが 1 つしかない場合、そのディスク・グループの名前が画面に表示されます。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 「表領域情報の指定」	<p>この画面には、Oracle Application Server Repository Creation Assistant が作成する必要がある表領域が表示されます。</p> <p>「サイズ」列で、表領域の適切なサイズを選択します。コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-9 ASM インスタンスのディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順 (続き)

画面	アクション
7. 「Oracle Internet Directory への登録」	<p>すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」: 登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合、「登録をスキップ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 「リポジトリをロードしています」	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。
10. 「成功しました」	「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。

6. インストール後の手順を実行します。2.9 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.6.2 標準のファイルへのインストール

この項では、ASM インスタンスの標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

ASM インスタンスに OracleAS Metadata Repository をインストールする際に、ディスク・グループにインストールする場合は、2.6.1 項「ディスク・グループへのインストール」を参照してください。

ASM インスタンスの標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが 1.4 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。

2. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。この場合に必要なパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は `-OH` および `-LOGDIR`、特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は `-REGNREALM` です。たとえば、次のようになります。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs -REGNREALM
abcRealm
```

3. RAW ファイル・システムに表領域を作成するかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Will you be creating the Application Server tablespaces on raw filesystems [Y | N]? N
```

4. Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードするかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Do you plan to use a Real Application Clusters database for your Metadata
Repository [Y | N]? N
```

5. 次の各画面で指示に従います。

表 2-10 ASM インスタンスの標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」: データベースのコンピュータ名およびポート番号を入力します。形式は、<code>hostname:port</code> です。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) : <code>myhost:1521</code></p> <p>例 2 (異なるドメイン) : <code>myhost.mydomain.com:1521</code></p> <p>「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。</p> <p>例 : <code>asdb.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 「警告: スワップ領域を確認してください」	<p>この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。</p>

表 2-10 ASM インスタンスの標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順 (続き)

画面	アクション
4. 「表領域作成の記憶域メカニズムを指定」	<p>「表領域は、ファイル・システムで管理されるように作成するか、Oracle Managed Files として作成します」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 「表領域作成のファイル・システムを指定」	<p>「標準のファイル・システム」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 「表領域情報の指定」	<p>「すべての表領域に同じディレクトリを使用」: すべての表領域のすべてのファイルと同じディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。このオプションの下でフィールドでディレクトリを指定します。ディレクトリに十分な空き領域があることを確認してください。</p> <p>「表領域ごとに別個のディレクトリを使用」: 表領域のファイルを別々のディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>「表領域」: ツリーを開いて各コンポーネントの表領域を表示します。関連するデータ・ファイルまたはサイズを表示 / 編集するには、表領域を選択します。</p> <p>「サイズ」: コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。</p> <p>「ファイル名」: データベース・ファイルの名前を入力します。例: portal.dbf</p> <p>「ディレクトリ」: 表領域のデータベース・ファイルを配置するディレクトリを入力します。「...」ボタンをクリックするとファイル・システムを参照できます。</p> <p>例: /opt/oracle/dbfiles/</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 「Oracle Internet Directory への登録」	<p>すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」: 登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合、「登録をスキップ」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-10 ASM インスタンスの標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順 (続き)

画面	アクション
8. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 「リポジトリをロードしています」	Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。
10. 「成功しました」	「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。

6. インストール後の手順を実行します。2.9 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.7 Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール

この項では、Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが 1.4 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。

特に、db_create_file_dest 初期パラメータで、Oracle Application Server Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータ・ファイルを作成するディレクトリが指定されていることを確認してください。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set db_create_file_dest = '/u03/oradata';
```

この初期化パラメータが設定されていない場合は、エラーが発生します。

2. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。2.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。この場合に必要なパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は `-OH` および `-LOGDIR`、特定のレールムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は `-REGNREALM` です。たとえば、次のようになります。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -LOGDIR /opt/oracle/repca/logs -REGNREALM
abcRealm
```

3. RAW ファイル・システムに表領域を作成するかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Will you be creating the Application Server tablespaces on raw filesystems [Y |
N]? N
```

4. Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードするかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

```
Do you plan to use a Real Application Clusters database for your Metadata
Repository [Y | N]? N
```

5. 次の各画面で指示に従います。

表 2-11 Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>既存データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>「ホスト名およびポート」: データベースのコンピュータ名およびポート番号を入力します。形式は、<code>hostname:port</code> です。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン) : <code>myhost:1521</code></p> <p>例 2 (異なるドメイン) : <code>myhost.mydomain.com:1521</code></p> <p>「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。</p> <p>例 : <code>asdb.mydomain.com</code></p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 2-11 Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順 (続き)

画面	アクション
3. 「警告: スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。
4. 「表領域作成の記憶域メカニズムを指定」	「表領域は、ファイル・システムで管理されるように作成するか、Oracle Managed Files として作成します」を選択します。 「次へ」をクリックします。
5. 「表領域作成のファイル・システムを指定」	「Oracle Managed Files」を選択します。 「次へ」をクリックします。
6. 「Oracle Managed Files のディレクトリ」	この画面には、Oracle Application Server Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータ・ファイルを作成するディレクトリが表示されます。この値は、db_create_file_dest 初期化パラメータから読み取られます。 このパラメータが設定されていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。 Oracle Application Server Repository Creation Assistant で別のディレクトリにデータ・ファイルを作成する場合は、db_create_file_dest 初期化パラメータを編集して目的のディレクトリを指定します (SQL*Plus またはその他のデータベース管理ツールを使用)。いったん 1 つ前の画面に戻り、「次へ」をクリックして再度この画面に戻ります。新しいパラメータの値が表示されます。 「次へ」をクリックします。
7. 「表領域情報の指定」	この画面には、Oracle Application Server Repository Creation Assistant が作成する必要のある表領域が表示されます。 「サイズ」列で、表領域の適切なサイズを選択します。コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。 「次へ」をクリックします。
8. 「Oracle Internet Directory への登録」	すでに Oracle Internet Directory があり、その接続情報がわかっている場合、「すぐに登録」を選択し、Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前およびポート番号を入力します。 「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」: 登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。 Oracle Internet Directory がない場合、またはその接続情報がわからない場合、「登録をスキップ」を選択します。 「次へ」をクリックします。

表 2-11 Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順（続き）

画面	アクション
9. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>前の画面で「すぐに登録」を選択するとこの画面が表示されます。</p> <p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは <code>iASAdmins</code> グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前（<code>jdjoe</code> など）または DN（<code>cn=orcladmin</code> など）を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
10. 「リポジトリをロードしています」	<p>Oracle Application Server Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成および移入します。</p>
11. 「成功しました」	<p>「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。</p>

6. インストール後の手順を実行します。2.9 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.8 Oracle Internet Directory への登録

インストール時に OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しなかった場合、登録のためにのみ Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再実行できます。-REGISTER オプションを付けて Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行すると、OracleAS Metadata Repository が登録されるだけで、スキーマおよび表領域がデータベースにインストールされません。

Metadata Repository が Real Application Clusters データベースにある場合、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するために Database Configuration Assistant (DBCA) は使用できません。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用して登録する必要があります。

注意：

- Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用して Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する場合、同じシステム識別子 (SID) で別の Metadata Repository が Oracle Internet Directory に登録されていないことを確認してください。別の Metadata Repository が登録されている場合、すでに登録されていることを示すメッセージが表示されます。
 - Oracle Application Server Repository Creation Assistant は、登録しようとしているデータベースが別の Oracle Internet Directory に登録されているかどうかは確認できません。(指定された Oracle Internet Directory にすでに登録されているかどうかのみを確認できます。) 問題なく登録される場合がありますが、実行時の動作が不安定になることがあります。
 - Oracle Application Server Repository Creation Assistant では、リリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository を、10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory に登録できません。
-
-

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する手順は、次のとおりです。

1. データベースがインストールされているコンピュータで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を起動します。2.1 項「[Oracle Application Server Repository Creation Assistant の起動](#)」を参照してください。この場合に必要なパラメータは、別のログ・ディレクトリを指定する場合は -OH、-REGISTER および -LOGDIR、特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は -REGNREALM です。-RAW または -RAC を指定する必要はありません。

例 1: Real Application Clusters 以外のデータベースにインストールされている OracleAS Metadata Repository を登録します。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -REGISTER
```

例 2: Real Application Clusters データベースにインストールされている OracleAS Metadata Repository を登録します。-RAC オプションを指定する必要はありません。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -REGISTER
```

例 3: Real Application Clusters データベースにインストールされている OracleAS Metadata Repository を "abcRealm" という名前のレルムに登録します。

```
runRepca -OH /opt/oracle/oradb -REGISTER -REGNREALM abcRealm
```

2. RAW ファイル・システムに表領域を作成するかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

Will you be creating the Application Server tablespaces on raw filesystems [Y | N]? **N**

3. Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードするかどうかを Oracle Application Server Repository Creation Assistant から確認されたら、**N** と入力します。

Do you plan to use a Real Application Clusters database for your Metadata Repository [Y | N]? **N**

4. 次の各画面で指示に従います。

表 2-12 OracleAS Metadata Repository を登録する手順

画面	アクション
1. 「ようこそ」	「次へ」をクリックします。
2. 「データベース接続の指定」	<p>データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「ユーザー名」および「パスワード」: データベースにログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。</p> <p>「ホスト名およびポート」: データベースのコンピュータ名およびポート番号を入力します。形式は、<i>hostname:port</i> です。</p> <p>Real Application Clusters データベースを登録する場合は、クラスタ内のすべてのコンピュータの名前を指定する必要があります。各 <i>hostname:port</i> はカンマ文字で区切ります。</p> <p><i>hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</i></p> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。</p> <p>例 1 (同じドメイン、Real Application Clusters データベース以外): myhost:1521</p> <p>例 2 (異なるドメイン、Real Application Clusters データベース以外): myhost.mydomain.com:1521</p> <p>例 3 (同じドメイン、Real Application Clusters データベース): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 4 (異なるドメイン、Real Application Clusters データベース): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain:1521</p> <p>「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。Real Application Clusters データベースの場合、サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。</p> <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 「警告: スワップ領域を確認してください」	この画面には、空きスワップ領域が少なくとも 512MB 必要であることが表示されます。継続するには「OK」をクリックします。Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了するには、「取消」をクリックします。

表 2-12 OracleAS Metadata Repository を登録する手順（続き）

画面	アクション
4. 「Oracle Internet Directory 接続の指定」	<p>「ホスト名」: Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前を入力します。</p> <p>「ポート」: Oracle Internet Directory がリスニングするポート番号を入力します。</p> <p>「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」: 登録の実行時に Oracle Application Server Repository Creation Assistant が SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続するようにする場合に、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 「Oracle Internet Directory へのログインの指定」	<p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。</p> <p>「次へ」をクリックして、登録を完了します。</p>
6. 「成功しました」	<p>「OK」をクリックして Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了します。</p>

登録が完了する前に終了する場合、または登録が失敗した場合

登録が完了する前に Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了した場合、または登録が失敗した場合、再登録のために Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再実行する前に手動による次の手順を実行する必要があります。

1. Oracle Internet Directory からリポジトリ・エントリを削除します。4.1 項「[失敗した登録のクリーンアップまたは Metadata Repository の登録解除](#)」を参照してください。
2. すべてのスキーマ・パスワードをデフォルト値にリセットします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user schema_name identified by schema_password;
```

3. すべてのスキーマ・パスワードをロックします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user schema_name account lock password expire;
```

この手順を実行後、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を再起動してデータベースを登録できます。

2.9 インストール後の手順

データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールした後、次の手順を実行する必要があります。

- 2.9.1 項「[sqlnet.ora ファイルの更新](#)」
- 2.9.2 項「[DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定](#)」

2.9.1 sqlnet.ora ファイルの更新

SQL*Net の設定を構成して、OracleAS Metadata Repository の ORASSO_PS スキーマと接続できるようにします。これを行うには、NAMES.DIRECTORY_PATH エントリに次のように LDAP を追加して、ORACLE_HOME/network/admin/sqlnet.ora ファイルを更新します (ORACLE_HOME は OracleAS Metadata Repository をインストールしたデータベース・ホーム)。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (LDAP, TNSNAMES, ONAMES, HOSTNAME)
```

この構成を行わないと、OracleAS Single Sign-On 管理ポートレットを使用したときに OracleAS Portal にエラーが表示されます。このエラーは、外部のアプリケーション機能を使用するために OracleAS Portal が ORASSO_PS スキーマに接続しようとして DB リンクを使用することにより起こります。この DB リンクの問題は、OracleAS Metadata Repository が存在するデータベース・ホーム内で構成された SQL*Net 設定を使用すると解決できます。

2.9.2 DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定

dcm スキーマをロック解除し、そのパスワードを設定します。この手順が必要なのは、(1) 「J2EE and Web Cache」中間層インスタンスのデータベース・クラスタリングのためにのみ Metadata Repository を使用する場合、および (2) Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しなかった場合のみです。

1. ORACLE_HOME 環境変数を、データベースがインストールされているディレクトリのフルパスを指すように設定します。
2. ORACLE_SID 環境変数をデータベースの SID に設定します。
3. dcm スキーマをロック解除し、そのパスワードを SQL*Plus を使用して設定します。

次の alter user コマンドはパスワードを "welcome1" に設定していますが、任意の値に設定できます。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/sqlplus "sys/password as sysdba"  
SQL> alter user dcm identified by welcome1 account unlock;
```

cleanMR スクリプトの実行

SQL 文を手動で実行して OracleAS Metadata Repository スキーマおよび表領域をデータベースから削除するかわりに、cleanMR スクリプトを実行することによってこれらのオブジェクトを削除できます。この cleanMR スクリプトは、これと同じディレクトリにある repca_cleanup.sql ファイルの SQL 文を実行します。

この章の構成

- 3.1 項「ハード・ディスクへのディレクトリのコピー」
- 3.2 項「cleanMR スクリプトの実行」

3.1 ハード・ディスクへのディレクトリのコピー

cleanMR スクリプトは、このスクリプトが含まれているディレクトリにファイルを作成する必要があるため、"Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" CD-ROM や Oracle Application Server DVD から直接実行できません。

CD-ROM または DVD にある clean ディレクトリ全体をハード・ディスクにコピーします。データベースを実行しているコンピュータで cleanMR スクリプトを実行する必要があるため、データベースをインストールしているコンピュータからハード・ディスクにアクセスできることを確認します。

表 3-1 CD-ROM と DVD 上の cleanMR スクリプトの場所

メディア	cleanMR スクリプトの場所
CD-ROM	"Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" CD-ROM <i>mount_point/repCA/repca/clean/cleanMR</i>
DVD	<i>mount_point/repca_utilities/repca/clean/cleanMR</i>

次の例では、このディレクトリを /opt/oracle ディレクトリにコピーします。

CD-ROM (マウント・ポイントを /cdrom とします) :

```
prompt> cp -r /cdrom/repCA/repca/clean /opt/oracle
```

DVD (マウント・ポイントを /cdrom とします) :

```
prompt> cp -r /cdrom/repca_utilities/repca/clean /opt/oracle
```

3.2 cleanMR スクリプトの実行

データベースが実行されているコンピュータで cleanMR スクリプトを実行する必要があります。

cleanMR スクリプトは、ハード・ディスクにコピーした clean ディレクトリにあります (3.1 項「ハード・ディスクへのディレクトリのコピー」を参照してください)。

このスクリプトは、ハード・ディスクにコピーした clean ディレクトリから実行します。次の例は、clean ディレクトリを /opt/oracle ディレクトリにコピーした場合を示します。

```
prompt> cd /opt/oracle/clean
prompt> ./cleanMR -OH db_OH -DBSID sid [-DBUSER dbuser] -DBPASSWD password [-DBROLE dbrole]
```

表 3-2 cleanMR コマンドのパラメータ

パラメータ	オプション または必須	説明
-OH <i>db_OH</i>	必須	データベースの ORACLE_HOME ディレクトリを指定します。
-DBSID <i>sid</i>	必須	データベースの SID を指定します。
-DBUSER <i>dbuser</i>	オプション	データベースに接続するためにスクリプトで使用されるデータベース・ユーザーを指定します。指定しない場合のデフォルト・ユーザーは "SYS" です。
-DBPASSWD <i>password</i>	必須	DBUSER のパスワードを指定します。
-DBROLE <i>dbrole</i>	オプション	データベース・ユーザー・ロールを指定します。指定しない場合のデフォルト・ロールは "SYSDBA" です。

例：

```
cleanMR -OH /opt/oracle/oradb -DBSID hrdb -DBPASSWD topsecret
```

注意：

- このスクリプトは、ODS スキーマ、および OLTS_ATTRSTORE、OLTS_BATTRSTORE、OLTS_CT_STORE、OLTS_DEFAULT、OLTS_SVRMGSTORE 表領域を削除しません。これらのオブジェクトは、Oracle Internet Directory に関係します。

スクリプトでこれらのオブジェクトを削除する場合は、`repca_cleanup.sql` ファイルでオブジェクト名を検索し、対応する行を非コメント化してください（このファイルは、cleanMR スクリプトと同じディレクトリにあります）。

- このスクリプトは、データ・ファイルを削除しません。

Metadata Repository の登録解除

Oracle Internet Directory から Metadata Repository の登録を解除する必要がある場合、または Oracle Application Server Repository Creation Assistant が Oracle Internet Directory に Metadata Repository を登録できなかった場合、この章で説明する手順に従って Oracle Internet Directory のエントリをクリーンアップします。

Metadata Repository を登録し直すには、まず Oracle Internet Directory のエントリをクリーンアップする必要があります。

4.1 失敗した登録のクリーンアップまたは Metadata Repository の登録解除

1. Oracle Directory Manager を使用して、Oracle Internet Directory に接続します。
 - a. Oracle Directory Manager を起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```
 - b. 「接続」画面で、接続情報を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
2. Oracle Internet Directory のデータベース登録エントリをクリーンアップします。
 - a. 次のようにエントリを開きます (図 4-1 を参照)。

「エントリ管理」を開きます。

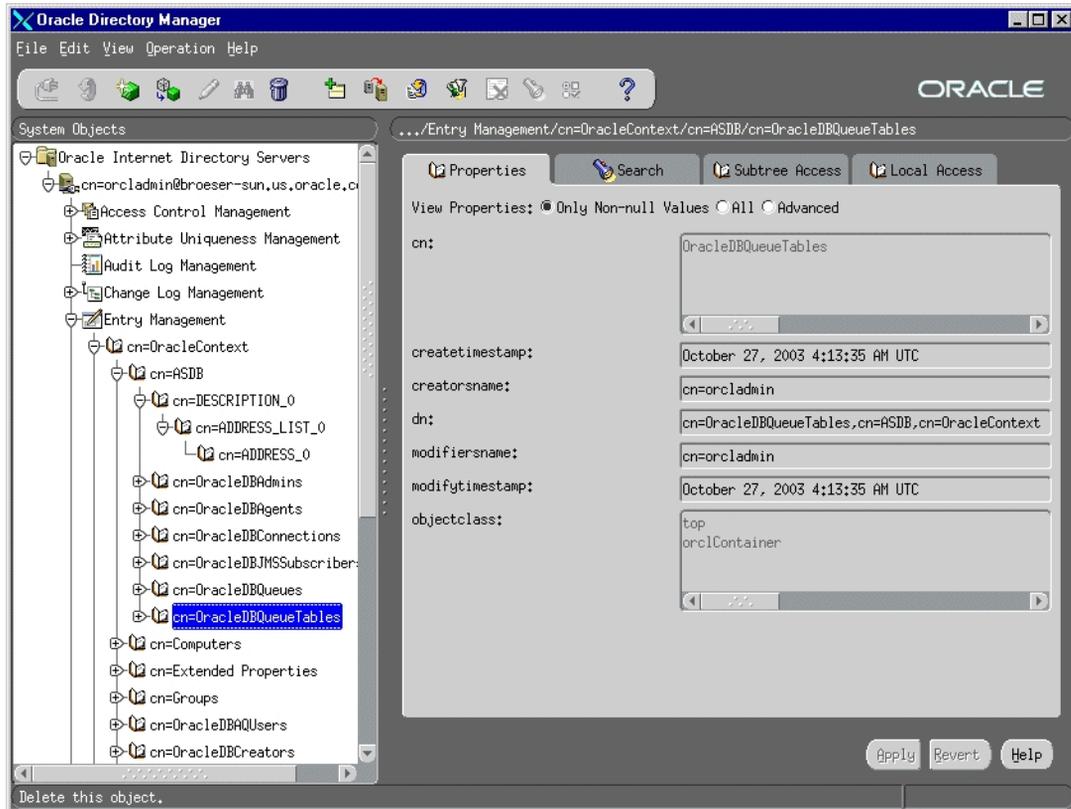
「cn=OracleContext」を開きます。

「cn=*your_database_name*」を開きます。
 - b. 「cn=*your_database_name*」下のすべての子エントリを、最下部の子エントリから削除します。

「cn=DESCRIPTION_0」エントリを削除する場合、まず最後の子までエントリを開きます。その後、最も深い階層の子から削除していきます。

エントリを削除するには、それぞれの子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログで「はい」をクリックします。子エントリを削除していると、エラー・メッセージが表示されることがあります。そのエラー・メッセージは無視できます。
 - c. 「cn=*your_database_name*」を右クリックし、削除します。

図 4-1 データベース登録エントリのクリーンアップ



3. Oracle Internet Directory のメタデータ・リポジトリ登録エントリをクリーンアップします。

a. 次のようにエントリを開きます (図 4-2 を参照)。

「エントリ管理」を開きます。

「cn=OracleContext」を開きます。

「cn=Products」を開きます。

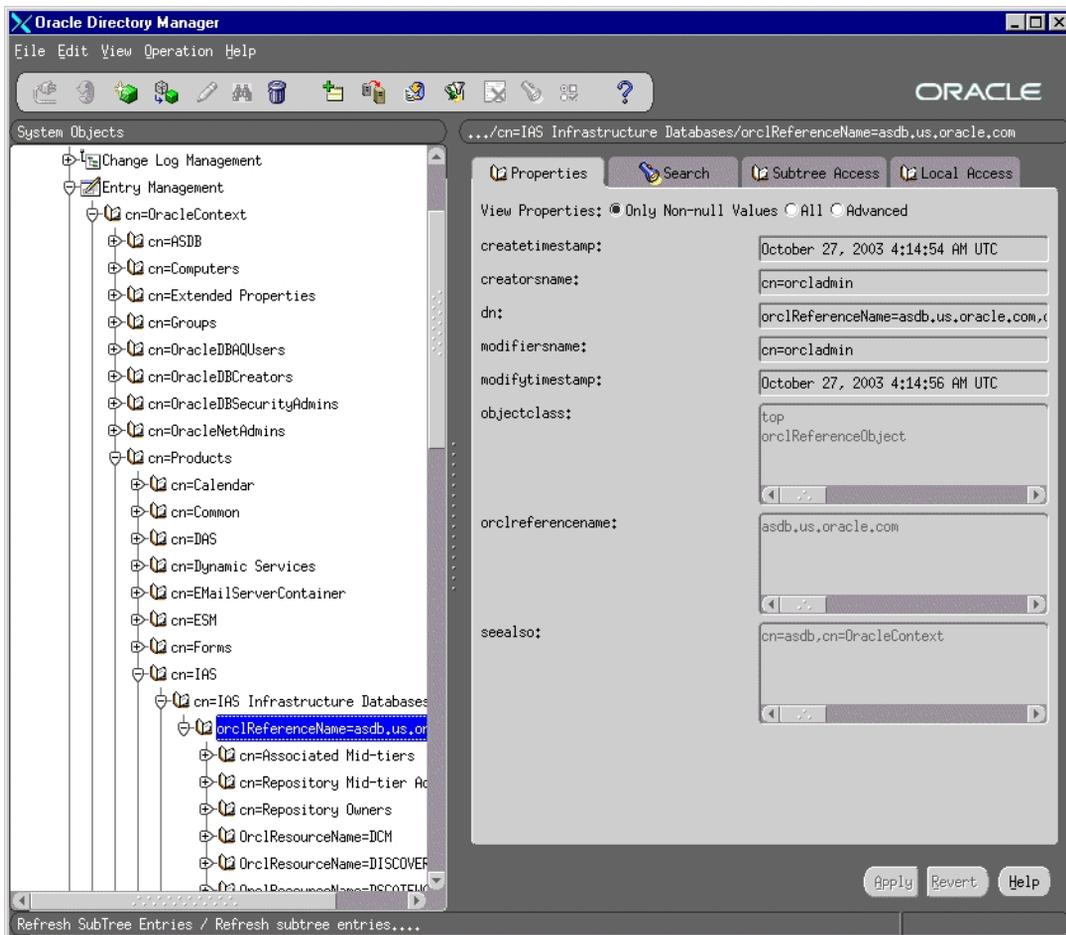
「cn=IAS」を開きます。

「cn=IAS Infrastructure Databases」を開きます。

「orclReferenceName=*your_database_name*」を開きます。

- b. 「orclReferenceName=*your_database_name*」 下のそれぞれの子エントリを削除します。
- c. 「orclReferenceName=*your_database_name*」 エントリを削除します。

図 4-2 メタデータ・リポジトリ登録エントリのクリーンアップ



5

トラブルシューティング

この章では、Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行時に発生する可能性のある問題とその解決方法について説明します。

この章の構成

- 5.1 項「Oracle Application Server Repository Creation Assistant のデータベースへの接続が失われる (エラー・コード:ORA-03113)」
- 5.2 項「ログ・ファイル内の問題のないエラー・メッセージ」

5.1 Oracle Application Server Repository Creation Assistant のデータベースへの接続が失われる (エラー・コード:ORA-03113)

リリース 9.0.1.5 または 9.2.0.4 のデータベース・パッチ・セットを適用する際に catpatch.sql スクリプトを実行しなかった場合に、このメッセージが表示されます。

この問題を修正するには、Oracle Application Server Repository Creation Assistant を終了し、データベースで catpatch.sql スクリプトを実行します。

5.2 ログ・ファイル内の問題のないエラー・メッセージ

OracleAS Metadata Repository をリリース 9.0.1.5 データベースにロードすると、ログ・ファイルに次の行が記録されることがあります。これらのエラー・メッセージは問題ありません。

```
Getting PreRequisiteInfo Informations from the PreRequisite file:
```

```
Returned database version is higher than the expected version  
ERROR-DBPostreq SQL exception:ORA-00904: invalid column name
```

```
ERROR-DBPostreq SQL exception:ORA-00904: invalid column name
```

```
Returned database version is higher than the expected version  
DB Pre-requisite validation completed.
```

```
DatabasePrerequisite Passed.
```

索引

数字

- 9.0.1.5 パッチ・セット (データベース), 1-6
- 9.2.0.4 パッチ・セット (データベース), 1-7

A

- ASM インスタンスのディスク・グループ, 2-21

C

- catpatch.sql
 - 9.0.1.5 パッチ・セット, 1-6
 - 9.2.0.4 パッチ・セット, 1-7
- cleanMR スクリプト, 3-2

D

- db_create_file_dest 初期化パラメータ, 2-26
- DBCA_RAW_CONFIG 環境変数, 2-10
- DBMS_LDAP パッケージ, 1-13
- DCM スキーマ
 - ロック解除, 2-34

O

- ORA-03113 エラー, 5-2
- Oracle Application Server Repository Creation Assistant
 - ASM を使用するデータベースへの実行, 2-20
 - DBMS_LDAP パッケージ, 1-13
 - Oracle Database 10g リリース 1 (10.1), 1-5
 - Oracle Internet Directory への登録の確認, 1-24
 - Oracle Managed Files を使用するデータベースに対して実行, 2-26

- Oracle Ultra Search ディレクトリの更新, 1-26
 - Oracle9i リリース 1 (9.0.1.x) データベース, 1-6
 - Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース, 1-7
 - OracleAS Metadata Repository の Internet Directory への登録, 2-29
 - RAW デバイス, 1-21
 - RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースに対して実行, 2-17
 - Real Application Clusters データベースに対して実行, 2-13
 - runRepeca コマンド, 2-2, 2-5
 - Standard Edition データベース, 1-8
 - 起動, 2-2
 - サポートされる Oracle Internet Directory のリリース, 1-25
 - サポートされるデータベース・リリース, 1-5
 - スキーマ, 1-17
 - データベースの要件, 1-4
 - トラブルシューティング, 5-1
 - ナレッジ・ベースの要件, 1-15
 - 場所, 1-2
 - パスワード・ファイル認証, 1-16
 - 必要な PL/SQL パッケージ, 1-13
 - 必要な初期化パラメータ, 1-8
 - 必要なスワップ領域, 1-25
 - 必要なディスク領域, 1-4
 - 必要なデータベース・オプション, 1-12
 - 表領域, 1-17
 - 表領域のサイズ, 1-19
- Oracle Internet Directory
- OracleAS Metadata Repository の登録, 2-29
 - OracleAS Metadata Repository の登録解除, 4-2
 - サポートされるリリース, 1-25
 - 登録の確認, 1-24
 - 特定のレルムへの登録, 2-3

Oracle Managed Files
OracleAS Metadata Repository に使用, 2-26

Oracle Ultra Search
Oracle Application Server Repository Creation Assistant によるディレクトリの更新, 1-26

OracleAS Metadata Repository
ASM を使用するデータベースへのインストール, 2-20
Oracle Managed Files へのインストール, 2-26
RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール, 2-9
Real Application Clusters データベースへのインストール, 2-13, 2-15
クリーンアップ, 3-2
スキーマ, 1-22
登録解除, 4-2
表領域, 1-22
ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール, 2-6

OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録, 2-29
Oracle Internet Directory の確認, 1-24
SSL での登録に必要なパッチ, 1-8
失敗した登録のクリーンアップ, 4-2
登録解除, 4-2
特定のレルム, 2-3

OracleAS Metadata Repository の登録解除, 4-2

Oracle データベース
Oracle Managed Files, 2-26
RAW デバイスベースのデータベース, 2-9
Real Application Clusters データベース, 2-13
既存のデータベースの使用, 1-4
自動ストレージ管理, 2-20
データベースの要件, 1-4
ファイル・システムベースのデータベース, 2-6

R

RAW デバイス
Real Application Clusters データベース以外での使用, 2-9
Real Application Clusters データベースでの使用, 2-17
既存データベースの最小サイズ, 1-21

Real Application Clusters データベース
Oracle AS Metadata Repository に使用, 2-13, 2-15
RAW デバイス, 2-17

インストールの概要, 2-14
クラスタ・ファイル・システム, 2-15
ボリューム・マネージャ, 2-15
runRepca コマンド, 2-2, 2-5

S

sqlnet.ora ファイル、インストール後の更新, 2-34
SSL モードで Oracle Internet Directory に登録
必要なパッチ, 1-8

い

インストール後の手順, 2-34
sqlnet.ora ファイルの更新, 2-34

え

エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ, 2-3

く

クラスタ・ファイル・システム, 2-15

し

失敗した登録、クリーンアップ, 4-2
自動ストレージ管理 (ASM) インスタンス
OracleAS Metadata Repository に使用, 2-20
ディスク・グループ, 2-21

す

スキーマ, 1-17
cleanMR による削除, 3-2
OracleAS Metadata Repository の, 1-22
スワップ領域の要件
Oracle Application Server Repository Creation Assistant の実行, 1-25

て

データベース
「Oracle データベース」を参照

と

トラブルシューティング
Oracle Application Server Repository Creation
Assistant, 5-1

な

ナレッジ・ベースの要件, 1-15

は

パスワード・ファイル認証 (既存のデータベース),
1-16
パラメータ、runRepca コマンド, 2-2

ひ

必要な PL/SQL パッケージ, 1-13
必要な初期化パラメータ, 1-8
表領域, 1-17
AUTOEXTEND, 1-19
cleanMR による削除, 3-2
OracleAS Metadata Repository の, 1-22
サイズ, 1-19

ほ

ボリューム・マネージャ, 2-15

よ

要件
スワップ領域, 1-25
ディスク領域, 1-4
データベース, 1-4

れ

レルム、Oracle Internet Directory, 2-3

